

鹽屋、ところ／＼風にさそはれて、煙たなびけり、東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也。略 中

清見がた關とはえらで行人も心計はとゞめをくらん

〔新古今和歌集十〕百首の歌奉りし時旅の歌

藤原家隆朝臣

契らねど一夜はすぎぬ清見がた波にわかる、あかつきのそら

〔萬葉集七〕雜歌、羈旅作

夏麻引ナツマヒキ海上ウミノ滄乃ソノ、奥津洲爾オキツノ鳥者トリノ簀竹跡スサキノ君者キミノ音文不爲ネセズ

〔萬葉集十四〕東歌、奈都素妣久宇奈加美我多能於伎都渚爾布禰波等杼米牟佐欲布氣爾家里

右一首上總國歌

〔書言字考節用集二〕乾キ坤カ象カ滄カ羽カ夫カ木カ作カ州カ由カ利カ郡カ

出羽國  
象滄

〔奥の細道〕江山水陸の風光敷を盡して、今象滄に方寸を責む、酒田の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂子を踏みて其の際十里ばかり、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海山かくる闇中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色も亦たのもしと、蜃の苫屋に膝をいれて、雨の晴る、を待つ、其のあした天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象滄に舟をうかぶ、先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の迹をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花のうへ漕ぐとよまれし櫻の老い木、西行上人のかたみを遺す、江上に陵あり、神功皇后の御墓といふ、寺を干満珠寺といふ、此の處に行幸ありしこといまだ聞かず、如何なるゆゑにや、この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海山天をさへ、其の影江にうつりて、西はむや／＼の關路をかぎり、東に塘を築きて、秋田に通ふ路はるかに、海北にかまへ、波打ち入る處を汐越しといふ、江の縦横一里ばかり、面影松島にかよひて又異なり、松島は笑ふが如く、象滄は怨むが如し、さびしげに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり、